

韓国と同志社

ある学生

同志社は韓国人学生の理想郷でありました。当時、大日本帝国には東京帝国大学を始め数多くの官公私立大学ならびに中等学校がありました。これらの学校の内韓学生に対する差別待遇とか、大日本帝国の植民地政策による韓国人学生の不遇を、私はここで語りたくはありませんが、いぢけた心の憤懣やるせない韓国人学生に対して、同志社のみが日本人学生と少しも差別を加えず、自由と自愛による新島魂の温情と理解とを以って、頑固な韓国人学生の魂をほぐしてくれたのであります。

金永昭という学生の次のような例があります。この学生が大印高等普通学校（中学）の三年のとき、漢学者であつたその父親が、民族主義運動の団体である新幹会の幹部で、当時『新幹会事件』として世間を騒がせた事件の首謀者の一人でありました。

金 泰 黙

金先生の息子であつた永昭君は『不逞鮮人の子』という理由で、本人には何の罪もないのに退校処分を受けました。

烙印を押された永昭君を相手にしてくれる学校はどこにもありませんでした。勉学の途を絶たれた永昭君の失望落胆は見る目も無惨なほどでありました。万策尽きたあぐくの果てに、同志社を尋ねて行きました。

当時、同志社中学の校長は野村仁作（退役）海軍大佐でありました。金君は野村校長先生にお目にかかり、卒直に彼の窮した事情を申し上げました。すなわち『私は不逞鮮人の子という罪名で退学処分を受け、もはや、同志社以外には行きどころのないものです。私を救つて下さい』と。野村先生はぎょろつとした目付で、一瞬、じつと見つめられたのち、『よし、入れてやる』と快諾されたのだそうです。

金永昭氏は、その後、医学博士（名古屋大）となり、アメリカで

五年間、脳外科を研究し、今は釜山で春海外科病院長となつておりますが、『同志社は天下第一の学園である』と常日頃、自慢の種とし、人々に吹聴しております。

現今、韓国には早稲田、明治、中央大学その他の、主として、私立大学の出身者が非常に多く、各学校の同窓会が年に一、二度催されます。同志社出身の者は毎月一度ソウルにおいて会合をしておりますが、毎回二、三十名の者が集ります。会合のたびに同志社時代の懐旧談に花を咲かせます。とくに同志社時代に私達の接した先生方の人格的感化、同志社精神、『新島魂』などが、話題の中心になります。

『良心を手腕に運用せよ』との、新島先生の教訓は、私達同窓生を一貫してつらぬく根本的な精神であります。

同志社の精神教育

終戦後、韓国は連合軍の援助で、半端ながらも、南半分は独立しましたが、北半分は共産主義に侵され、三八度線を境としてその勢力圏内に入ってしまった。太平洋戦争中に、絞り取れる限りのものは全て絞り取られた様は日本と韓国は全く同じでありました。終戦直後の日本の社会秩序の混乱や、経済的貧困を想像して見て下さい。そのような状態のところへ、いわゆる『朝鮮動乱』なるものが勃発して、北から南へ、そしてまた、南から北へ押し返す津波のような兵乱のため、地上のあらゆるものは徹底的に破壊し尽されました。休戦後といえども、共産主義の絶えざる脅威の下に六十万の常備軍を維持せねばならないこの弱少国の政治的、経済的負担、遼

遠たる再建の途、貧しく、果敢ない、国民の日常生活。このような社会状態の中で、生き抜くためには、また、それなりの『行き方』というものがあると思いますが、われわれ同志社に学んだものは、幸か、不幸か、同志社魂、新島魂というものが徹底的に身に染み込んでいる、余りにも良心的であるせいか、それほど、出世した者はおりません。私達の大部分はキリストの教に従い、YESはYES NOはNOと、いったような生き方をしています。

この地の同窓会のメンバーは全て戦前に卒業した人達であり、終戦後の後輩を迎えることの出来ないのを非常に残念に思っております。同窓会メンバーを学校別に見ますと、同志社中学を経て東京帝大や他の大学または専門学校を出たグループ、他の中学を卒えて、同志社の専門学校、高商、予科を出て、他の大学に進んだグループ、他の中学、専門学校を出て大学だけを同志社に学んだグループなど色々ありますが、この二年あるいは三年の短かい同志社生活を通じて、その一生を貫くほどの『主義』を獲得せしめることを得たのは、当時の同志社の精神的教育がいかに成功적이であつたかを物語るものであるといわざるを得ません。

私は神様の特別なおん導きにより、中学を二年から四年までの三年間、予科を三年間、大学の神学部を三年間学び、合計九年間、同志社におりました。私の妻の全順得は女専英文科を四年間、大学の神学部社会事業専攻で三年間学んで、前後七年間、同志社のお世話になりました。夫婦揃って同志社の出身であり、この地では同志社家族として知られており、私達はそれを非常に幸福に思っております。

韓国の同志社人

現在、韓国における同志社出身の著名人をあげましょう。まず、七十を越えた高齢者で同志社出身の有名人が二人おられます。呉相淳先生と洪秉奭牧師であります。お二人とも昔の同志社神学校で修学された方です。呉先生は初年はキリスト教の伝道師であったのですが、改宗して仏教徒になり、空超と号し、超世俗的な哲学者、詩人として有名であります。残念なことに先年物故されました。

洪先生はデンマークより農業協同組合運動を韓国に紹介した最初の人であり、YMCA人として、今だにお元気でソウルにて活躍しておられます。数年後輩に李命錫牧師がありますが、老年のため今は半ば隠退しておられます。私より中学の一年先輩では任文桓氏がおられます。同志社中学を出て六高から東大を卒業し、李承晩権下で農林部長官を務めました。軍事革命政権の下では高商出身の朴忠勳空軍准将が商工部長官を務め、予科出身の海兵准将文熙奭氏が文教部長官を務めました。

実業界の有名人には金元泰氏がおられます。高商出身で天一貿易会社の社長であり、韓国屈指の実業家であります。また、高商出身で銀行家として相当な地位に登っている人々が数人おります。徐台均、権泰斗、金麟洙氏らであります。

教育界には高麗京女史がおります。女専の英文学科から大学の法学部を経て、ミシガン大学でPH・Dを獲得し、現在はソウル女子大学の学長をしております。鄭大為氏は神学部出身でエール大学よりPH・Dを得て、現在、建国大学の若き総長として活躍しております。

ます。神学科の大先輩の趙龍基氏は慶州中、高等学校の校長であり、金徳俊氏は社会事業大学の学長、尹聖範氏はメソジスト神学校の教授をしており、バーゼルにてTH・Dを授けられました。また徐南同氏は延世大学神学部の教授で、ポール・デイリヒ研究の第一人者であります。呉銀洙氏は崇実大学のチャブレンをしております。

女専の家政科出身者が相当おりますが、今は殆んど隠退しています。大学出身者も隠退している人が多いようです。女専英文科出身の有名な陶秀作家・金末峰女史は惜しくも数年前他界されました。

恩師と友人

私達夫妻は昭和十四年、富森京次先生の斡旋でオベリンに行き、そこで学問を継続し、第二次世界大戦中はアメリカ国務省に採用され、そこで日本向けの放送を担当し、日本語で日本が早く降参するように放送したのであります。これは極く秘密裡に行なわれたのでありますが、後に聞いた話によると、日本帝国政府は私であるということを探知して、不在裁判の結果、死刑を宣告したそうであります。昨年、東京を訪問したとき、NHKの欧米部次長をしている新野寛君に再会し、同志社時代や色々な過去の積る思い出話をしているうちに、新野君は第二次世界大戦中に南太平洋方面に出陣し、アメリカ兵に向って降参するように英語で放送したとの話を語り合っており、二人で大笑いをしたことがあります。第二次大戦後、私はハワイとワシントンにある韓国教会を牧したり、ソウルの南大門長老教会の牧師をしたり、中央神学校の校長、韓国YMCAの総務などを歴任しました。現在は故山に帰り、大邱で一九〇七年に創立さ

れたミツシヨン・スクールである信明女子高等学校の校長として、
二千余名の将来の韓国の母性教育に従事しております。

稿を終えるに当って、同志社に対する想いが再び沸き上つてく
る思いです。

海老名弾正先生の講演を聞いて感激し、新島先生を私淑して同志
社に入學し、九年の間、多くの先生方に深くお世話になりました。
特に、中學時代には末光信三先生、本多虎雄先生、加藤延年先生が
想い出されます。原忠雄先生には昨年ホノルルでお目に掛り、いろ
いろ同志社時代のことどもを語りあいました。

予科時代には偉大な教理學者、日野真澄先生より基督教倫理を教
わたたことでもあります。神学部では大塚節治先生、とくに私達をオ
ペリンにお世話して下さった富森京次先生は一生を通じて忘れられ
ない恩人であります。堀貞一牧師のような精神的指導者を想い出す
と、同時に、新島先生の奥様のお話などをよく思い出します。夏目
漱石の『坊ちゃん』のモデルであつた弘中又一先生から幾何を學ん
だことは、韓国人には稀れな誇りの一つであります。

神学科の同級生に棟方文雄、土居真俊、駒井四郎、久保政義らの
諸君が母校のために尽していることは、甚だ嬉しいことでありま
す。昨年、東京を訪れ、久しぶりで神政三、名尾耕作君らと再会
し、非常に嬉しく思いました。その外にも、多くの先生方がおられ
ますが省略させていただきます。

最後に、神様のおん祝福が同志社とのために尽力されていられ
る皆々様の上に永久に、ましまさんことを祈り上げます。

(昭和十一年大神卒、韓国・信明女子高校長・神学博士)

憲法調査会批判講座

4月25日	憲法調査会の実績 憲法調査会存在の違憲性	黒田了一 土井多賀子
5月2日	米国とカナダにおける憲法調査の成果 ヨーロッパにおける憲法調査の評定	上田勝美 山下健次
5月9日	レーヴエンシユタイン教授の第九条改悪論 ウオード教授と日本国憲法	松下泰雄 阿部昭哉
5月16日	「高柳意見」の保守的側面と反動的側面 いわゆる「十八人組意見」と其の批判	田畑忍 田畑磐門
5月23日	広瀬・神川・大石三氏の改悪論批判 首相公選中曾根構想について	太田雅夫 小野哲
5月30日	基本的人権と日本の政治 憲法改悪に対する仏教徒の姿勢	西田毅 市川白弦
6月6日	原水爆問題における憲法 歴史的に観た天皇論	井上健 中瀬寿一
6月13日	改憲と国際平和の問題 憲法調査会最終報告書批判	恒藤恭憲 一円一億
時 所	同志社大学明徳館一番教室 4月25日より毎週土曜日午後一時半より・無料 主催 憲法研究所 同大法学部研究室内	

欺むかざるの記

新島先生と福井市

私は明治四十年六月五日に福井市の中央にある大名町で生れた。福井は自然的にも社会的にもあまり恵まれていないようである。先ず氣候がわるい。十月末から雨霰で空は鉛色にどんよりと曇り、やがて深雪となり、三月の終りによく黒い土をみる。この黒い土をどんなに待ちこがれていたことであろう。雪解けとともに春はおとずれるのである。城跡の石垣や堤にタンポポ、スマイレの花が咲いて、四月なかばに桜が満開となる。お塚にボンボリと桜の映る太平の風情は、明治から大正にかけての福井の情趣であった。昭和になつて空襲と地震の二重の苦難を体験した福井市民は、その逆境にもめげず不死鳥のごとく起ちあがり、その復興ぶりは目覚ましく、羽二重以来の織物産地としての底力は焼土にビルを建設し、昨今では

青井厚

面目を一新して織物王国としての偉容をととのえたのである。

同志社と福井市との関係については今から八十余年前、新島先生が福井の信徒におくられた書翰によつてうかがうことができる。

「前文略―小生福井逗留中一日竹原三宅二氏之案内ニテ川之西なる山之頂上ニ登リ市を眼下ニ見をろし平坦なる田地あり村落群をなし四方ニハ山嶽巍々乎トシテ兀立するを見歎して曰く美なる哉此風景乍去此市此村落之人之神之道を信するニ至らば其美なる事幾倍なるぞと申し其市之中兄弟三四僅かに指を屈する丈ケの兄弟あるを思へば神ハ既ニ福井之市ニ良種を播キ賜へりと思ヒ常ニ神ニ謝シ又兄弟之良キ地ニ播かれし種之如く鳥に喰まるゝ事なく石地ニ落ち直ニ出テ直ニかるゝなく他草之為ニ覆はるゝなく真之信仰と正しき言行を以テ神の御前人々の前ニ百培六十倍三十倍之実を結ビ候様日夜希図仕且真神之御助けと聖靈之御導き兄弟之上ニ止まらん事を祈候 今



仮令伝導師なくも活ける眞の神活ける聖霊兄等之中ニ御働きあり何卒兄等之信仰ハ旭日之東ニ登るか如く弥高弥輝き主之御栄光を世之人々の前ニ御顕しあらん事を相望候」(日付明治十六年十月二十三日、新島先生書翰集 九四二頁―九四三頁)とあり、新島先生は仏教王国とうたわれた北陸を伝道され、福井市の足羽山にも足跡をのこされたのである。福井市には東西両本願寺の別院があり、これにおかれてキリスト教の伝道はあまり冴えなかった。昭和二年の春、私が同志社大学予科に入学したとき私一人で、在学生の先輩は数名にすぎなかったが、今日では毎年数十名の入学者があり、まことに今昔の感がある。私達、新島先生の衣鉢をつぐものとして「神ハ既に福井之市ニ良種を播キ賜へりと思ヒ」の先生の御期待に副うよう、それぞれの職場で新島精神を生かしたいものである。

迷える羊

私が初めて教会に出入したのは五歳の頃であった。家の近くにメソジスト教会があり、それは福井藩の家老の屋敷跡に建てられ、幼稚園を付設し、また、アメリカ人の宣教師館が緑の森の中に異国的な情趣をただよわせ、多感な幼年時代から少年時代への私に夢と詩を与えてくれたのである。

祖父は熱心な仏教信者で、孫四人の兄弟に揃いの着物をきせて西別院に参詣することが唯一の楽しみの方であった。教会の前を通ると「耶蘇教になると家におかんぞ」こんな言葉が今なお耳にのこっている。それでも友達をさそって日曜学校に通った。その都度もらうカードが幼な心には真珠のように映った。小学一年のクリスマス

スには「マタイ伝第五章」を暗誦した。十六歳の頃当時の進歩的な文化人として福井にみえた日本キリスト教会牧師の鎌田研一先生にひかれて「聖書」や「クラウン・リード」をお宅に習いに通った。後に先生は牧界のほか作家としても名声をあげられた。当時説教にデモクラシーを述べたところ、刑事が尾行して困ったといわれたのを覚えている。後に福井英語学校に通い、今の平安女学院長の岡島先生に英語会話を習った。

祖父は仏教信者のせいか慈善心に強く、当時(大正六年)二千元の五分利公債を福井市に寄付し、その利子を社会事業につかい、四十年後に元本が長男にかえるようにした。男四人の教育盛りの子供をかかえた父はこの処置には不満のようであった。数年前四十年の満期はきたが、証書はそのまま私の篋底に眠っている。

父はひとりごで幾多の肉體的な欠陥があったようである。しかし教会へゆくことをすすめたり、学問を尊敬し、子供達の本屋での借金にはけつして嫌な顔をしなかった。母は黙々として子供の成長のため働いたのに対し、父は男として子供達の立身出世を願って苦慮したようである。

昭和十七年に私は堀先生の下で受洗した。先生の燃えるような信仰の力を、今尚忘れることはできない。

ずっと以前、哲学の浜田与助先生から、日本の寺院には立派な庭園がある。キリスト教会もそれにふさわしい庭造りを考えてはとのお話を記憶している。幼い日の回想に、美と信仰とは必ずしも無縁でないようである。

松^{かつお}魚の味

今から三十六年前、私が予科に入学したとき、退役軍人の体操の先生がおられた。非常にきびしい先生であつたが、心はやさしい人であつた。私が入学してまもなく兄の古い赤靴をはいて登校したら、早速黒いコールドで塗りつぶされたことがある。しかしすこしも腹が立たなかつた。その先生がある日「同志社は松魚のようなものだ。見かけはバットさえないが、噛みしめれば噛みしめるほど味が出る」といわれた。同志社に在学中は大して有難味を感じないが、一度同志社をはなれて同志社の学生生活を回顧するとき、誰しも「心のふるさと」としての同志社に無限の愛惜と思慕を感じるようである。有終館や神学館の赤レンガの建物は、地方からきた学生には何となくそぐわないものを感じるが、そのうちに私達の生活に融けこみ、一体となり、新しいパーソナリティを形成するのである。これを伝統の力というのかも知れない。

同志社はいつも動いている。動いていることは生きていることである。しかしこの動きは「安定のための動揺」であり「よりよきものへの前進」であつて、けつして「猪突邁進」であつてはならない。自らの動きを鏡に映して方向をまちがわぬか、それを吟味する心の余裕がほしい。その心の余裕の必要性を教えることが教育の大きな使命の一つである。これを忘れて同志社教育はありえない。

牧野先生の想い出

初めて先生に面接したのは昭和十三年の秋かとおもう。私は学生

をつれて若王寺の参道の修理に出かけたとき、先生は総長事務取扱として初めての視察で、たしか「新島先生と私」について語られ、特に先生の概をかついたことにふれられたようだ。昭和十七年の夏は、東山荘での夏期学校からの帰途、ライ患者慰問のため復生病院を案内してもらつた。戦雲急を上げて学生の勤労動員がはじまると、私達は先生を山陰の奥地に、工場の塵埃と喧騒のなかにお迎えした。冬の琵琶湖の干拓には、櫓のつて東奔西走されたのを思い出す。当時同志社のおかれた立場が利あらず、先生は文部省や宮内省詣でなどされて、人知れず御苦労があつたようである。

先生は常に同志社の総長は新島先生である。自分はどこまでも事務取扱であるといわれた。先生はそうのように謙虚な人であつた。牧野先生の履歴が物語るように、先生こそキリストの愛の実践者であつた。同志社精神とは何か、いろいろな見方もあろう。私は櫓の下の方持にあるとおもう。自らをとかして他を照らすにある。地の塩となる。先生は同志社の未曾有の難局に直面したとき、敢然とこれをうけて立ち、その永い苦難の間を安泰に支え、同志社の今日の大成の基礎をつくられたのである。盛大な京都市葬にあたり、大塚元総長は「勲三等」は天爵なりと語られ、高山京都市長は声涙ともにくだる弔辞を述べられ、断腸の感ありで結ばれた。健康家でよく眠り、電車の中で手紙をしたため、動き出した電車を追いかけて乗られたお元氣な御姿をもうみることはいえない。淋しいことである。

日進月歩

元工学部長、教授小山熊次郎先生はまれにみる謹直な先生であら

れた。私は工業専門学校時代から特に親しくしていた。戦後学制改革で工専から大学にかわる時、学内には相当の抵抗があり、先生は四面楚歌にあった。私は同志社において医学部に代る工業教育の必要性を勇敢に進言したのである。爾来、正月二日には御ついでではあったがいつも拙宅に御みえになった。私はその義理堅さに恐縮した。お亡くなりになる前年の正月のことである。先生は「そこひ」の眼病で老衰も加わり、いたいたしくみえた。そのとき先生は「学問は日進月歩する。私の学問は尚更である。年をとってもとに残されぬよう、見えぬ眼を開いて勉強している」といわれた。この言葉は私にグキリときた。若い壮年の元氣な身で怠っていないか。顧みて慚愧たるものがあつた。「日進月歩」古いききなれた言葉であるが、常に新しく強く私の心に迫ってくる言葉である。「日々新者不老」生理的な肉体の老化はやむをえないかも知れない。しかし日進月歩の新しい学問を追求することは学問にたずさわる者のつとめである。日々新しく生きてゆくことによって青春の情熱を呼びもどし、前進してゆくところには永遠の青春があると信じている。先生は今や亡し。されどその教えは私の心に灯をともしている。うれしいことである。

マス・プロ教育について

同志社大学はマス・プロ教育をやっていると非難めいた不満をきくことがしばしばある。同様に私も現在の同志社大学のある部分におけるマス・プロ教育の実体を認め、その弊害も知ってこれが改善に努力している。マス・プロによる被害は、教わる者とともに教え

るものにもある。しかし問題は単に数字的な改善だけでは解決できない問題があることを強調したい。

本来私立学校は官立学校とちがひ経営の問題がある。その限りにおいてある程度のはやむをえない。今日、通信教育やマス・コミ教育が盛んにとりいれられて相当の成果をあげているとき、かつての塾的小数教育にのみ夢を追うことはゆるされない。だからといって安住はこれまたゆるされない。先ず、教育可能な適正な数字的調整をはかることが絶対的に必要である。加えてそれとともに教授も学生も協力してマス・プロ教育の弊害を除去し、積極的に教授と学生との接触、人格的融和をはかるよう相互の努力が必要である。私は昭和の初め住谷悦治先生から教わったのであるが、私達のコンパには先生はお子様の重病にもかかわらず参加され、また、長谷川如是閑氏の「我等」という小冊子を、わざわざ鞍馬口の下宿まで届けていただいて感激したことがある。この教育愛に燃えた御真情、これがマス・プロ教育解消の原動力であるとおもう。私達は体制・組織・規程の改善とともに、教育愛の燃焼を忘れてはならないとおもう。学界でも著名な若い進歩的な学者があるとき、「私のゼミはできない人を歓迎している。できない人によいところをみつめて教育してゆきたい」といわれたことがある。私はこの提言に感銘し、今更のごとく同志社出身でない先生に一層敬愛の念を深くしたのである。新島先生の機械主義に流れるなどの人格教育の源流はここに見出すであらう。このことはけっして学問を軽視し、秀才をおきざりにすることではない。むしろ教育の本質論である。



讃礼社同志

子繁辺田

1

何が幸福だと言って、自分はいい学校を卒業した者だ、というよろこびをいつも感じているぐらいいしあわせなことはいない。

明治四年生れの私の母は、十七歳の時に私の父と結婚した。その時、父が「これからは女の人も勉強をせんといかん」と言って、母を同志社女学校に入学させた。いまポケット・ノートをひらいて見ると、母の十七歳の時と言うのは、明治二十年である。父は府立医学専門学校の第一回の卒業生で、当時はその医専の先生をしていたようである。医専のそばの丁度府立第一女学校（現在の鴨沂高校）の裏の宮垣町に住んでいた。父は私を育てている時にも口ぐせのように言った。

「わたしはドイツ人を先生として医学を学んだのや。漢学や儒教は学ばなんだ。女に対する儒教の教、女大学の教はわたしは大きらいや、女も勉強せにゃあかん」

今から思えば、父は自分の画く教育ある女性を母によって実現しなかったのかもしれない。母は毎日早く起きて、台所仕事を終えると、姑になる私の祖母にあとをたのんで家

連って出た。梨木町に面している御所の門を入って、今出川御門の方にはすかいて歩いて通ったそうであるが、半分も行かぬうちに、いつも始業のかねが聞えてきた。いきせききって学校に走り込んだという。

母は英語の本を開くと、学生の頃を思い出して、英語で讃美歌を歌ってくれた。たのしい学校も、子供が生まれるために止めなければならなくなった。その悲しみを級友に告げると「おうばさんをやって、いらっしやいよ」と皆にすすめられて、貧乏でうばなどやとえない自分がほんとうに悲しかったと、私共に何回も話して、自分の同志社中退を悲しんだものである。新島先生のこととは、

「新島先生は、かんの高そうな先生に見えた」と言っていた。直接お習いしたことはなかったのかもしれない。外人の先生のお名前もよく言っていたがどなたのことだったのだろうか。

私は幼い頃から母の口から聞かされた同志社の話を、想像で画いて、美くしい、あこがれの学校としていた。丁度私が府立第一女学校を卒業する頃に、第一に高等科というのができた。英語の時間が多くて、同志社の英文

科のようなものだったと思つたが、私はしゃにむに同志社に入りたかつた。

2

この頃、人づくり人づくりということが言われるが、私は同志社教育は人づくり教育だつたと思う。というのは、私はよくあちこち旅行をする。その時「私は同志社です」と言う人達にお会いすると、きまつて、共通な感じとか、においといったようなものがある。善良で柔和なまなざし、そして、心の暖かさが感じられる人柄である。正しいことを愛し、悪いことのできない人柄である。

これは、キリスト教の教えを身につけていられる諸先生方の人格の影響によるものと考えるべきであつて、なおその上に美しい京都御所をひかえたよい環境なども大きな力となつてゐるものと考えられる。

今思い出してみると、毎朝の礼拝は実にすばらしいものであつた。多感な年齢であつたから、聖書の言葉に感動したことも幾度もあつた。感動がただ感動としてだけに止まらず、ながい習慣をたち切つたり、考え方をすっかり変えさせたりしたこともあつた。壇上

に仰ぐ総長の海老名弾正先生、キリツと和服を召された松田道子先生、それにミス・デントン。

海老名弾正先生は「女子は男子と同等の教育を受けねばならない」と男女共学実現に対して非常な熱情をかたむけられ、夫人と共に海外をその視察のためにまわられた。先生の御努力のおかげで、私達は、国立の学校が新憲法以後に門を女性に開くよりずっと前に、同志社で共学をすることができた。「その人の持つ女性観はその人の経験した女性によつて決定される」私はいつもそう思つて、ジョン・スチュワード・ミルのテラー夫人に思いを馳せるのだが、海老名先生の場合もまさにその通りである。みやさん、みやさんと先生が呼んでいられたみや子夫人の御立派であつたことは、今また、あらたに思い出されてくることである。

ミス・デントンには必ず毎週、マイ・ディアー・ミス・デントンにはじまる手紙を一つ書かなければならなかつた。この間も、一たびのその手紙がでてきた。読んでみるとその時々何かしらを先生に書き送っている。一つやよんで返して下さつて、先生はえらかつた

なあとと思うと、あのお姿もお顔も、遅刻してきた私達を「泥棒泥棒」などと連呼しながらびつこひきひきおいかけてこられた様子までがハツキリ思い出されてきて涙ぐむ。私達は悪い生徒だつた。ミス・デントンのお客様は実に有名な方ばかりだつた。ミス・デントンのお世話をよくして下さつた人なつこい、やさしい星名先生。同志社人の多くに影響を与えられた方にバトレト夫妻がある。

英文科三年の頃だつたが、学会会で私達は武者小路さんの作のキリストをだます劇をした。キリストには現在難波紋吉先生の夫人、当時の加藤照子さん、キリストをだます三人の悪魔に片桐さん（作家大庭幸子さん）と飯塚さん（故人となられた）と私とであつた。三人の悪魔が、めくらと、いざりと、つんばになつて、キリストになおしてほしいと近づくと、キリストが「御心の如くなれ」とか言つて、悪魔の頭に手を置かれる。すると、目は開き、足は立ち、声は出るようになつて、三人は大よろこびで、キリストのまわりを礼拝する。キリストがあらをむいていられる時、たしか私は舌を出してあざ笑つたように思う。本質的に善良な加藤さんもなかなかキ

リストをうまく演じられたし、われわれ悪魔だつて相当やつつもりでいた。いい気になつて引きあげてくるとミス・デントンがデントンハウスにこいといつていられるという。何かしかられるらしいと思つてみんなで行くと、先生はクシャクシャの字を紙切れに書いて渡された。これを持つて、バトレト先生のところへ行けと言われるのである。何と書いてあるのか、全くよみがくくらない。

私達はしおしおと梨木町のバトレト先生夫妻をおたずねして、その小さい紙きれを夫人にお見せした。私達ははじめておたずねしたのだけれども、御夫妻にやさしくむかえられた。ミス・デントンのお手紙はこの生徒達はキリストをだましあさげる劇をした。どうか叱つてほしいと書いてあつたのである。

バトレト夫妻は、あれこれキリストが関係される劇の写真を見せて下さつた。ある一つは、十字架を背負つてキリストが行かれるのを群集が見てさわいであるような場面であつた。群集は指さしているが、キリスト様のおからだそのものは見えていない。その他二、三の話や絵でミスター・バトレトと夫人はともども、キリスト様を劇では出さないという

ことを話して下さつたのである。叱られるところではない。奥様お手づくりのクッキースと紅茶で立ち去りかねるような暖かい気分にひたらせていただいた。以後、夫人は私を「マイ・ディアー・ブラインド・デビル」と呼んで下さつた。夫人ももうおなくなりになつてしまつたが、ああいふ御立派な方々が同志社にいられたことは、私達学んだものにとつて何というしあわせであつたらうか。

ついこの間英文科を出、また、大学を卒業したように思うのに、ずい分年月がたつてしまつた。というのは「あら先生、お忘れになりましたか」などと言つて挨拶する人の顔を見ると、なる程、私が、その方の英文科時代、あるいは家政科時代に教えた顔が、そこにあるのだけれど、近況を話していると、娘がとつて孫が幾人あるとか、息子や孫と暮しているなどと言われる。

今度総長になられた住谷悦治先生なども、おならしい時と少しもおかわりになつていない。少し肉づきがよくなつたかと思うぐらいである。しかし、お子様やお孫様と御一緒の御年賀をいただく。年月はずい分流れたのである。

この頃の同志社はどのようなになっているのであろうか。卒業生としてはこれが一番知りたいことである。知らないのはお前に熱心がないのだと言われるかもしれない。実際、京都へ行けば、寸暇をさいて同志社をたずねているか？ ノー。どこへ行けば同志社気分にひたれるか。校内をぬげるだけでもうれしいのだが。

新島先生の御心を心として、先生方の御努力で同志社教育がなされていることと思う。スポーツ・ニュース一つ見ても、同志社、同志社と思つて読んでいる人が幾人あるかしかない。ほんとうに同志社の成長と繁栄がいられる。

今年の正月三日のことだつた。専修大学の経済学科や法律科の男女の学生が遊びにきて、カルタ遊びをした時のことである。読み役の私がみなと並べるのを待っている時、その一戦を休むことになったT君が私のそばにきて言つた。

「大西先生でいい方ですね、同志社の学生時代の思い出話をして下さつたのです」

と話しかけた。大西洋三先生は同志社大学英语文学部の出身で英語を教えていられる。同志社の学生時代、ある寒い日にストーブをこきながら、一緒におられた先生のお話を耳をかたむけ感動されたという思い出話である。

その先生は「人間一生の仕事を三角形にたとえれば、学生時代の勉強は丁度その底辺にあたる。これがしつかり、大きなものであれば上に立派な三角が打立てられる。これが狭く、弱いものであれば、大きなものはたない、君達は学生時代に慇ふかく勉強しなさい」と教えられたという。大西先生もまたストーブに手をかざし、うつむいて静かにT君達にこの思い出を語られたのである。そこでT君が無遠慮に言うには、

「僕は太西先生のお話を聞くまでは、田辺先生が講義の終りに私達に言って下さった言葉を生活の第一基本としていました。しかし太西先生のお話を聞いてからは、太西先生のお言葉を第一として、二番目に先生のお教えを置いているのです」

と。私も毎年最終の講義で、学生達にはなむけの言葉を送ることにしている。T君が同志社の生んだ太西先生に感動したことは、私に

とってなんともうれしい事柄であった。現在、吉川末次郎先生も大きな教室で慈味あふれる講義をしていられる。同志社精神はこうしてあちこちに根を下して行くのである。

4

最後に亡くなった私の夫平学も、四、五歳の頃新島先生御夫妻に大変かわいがっていたのだいそうである。

寺町丸太町上るところの、大きないちようの葉が晩秋には金色に光り、春には白いもくれんの花が咲く同志社大学女子学生の寮になっていた家は、田辺の祖父良顕が隠居した家である。田辺はその家で生れた。新島先生のお宅が近かったために、毎日毎日遊びにうかがったことである。いつか新島先生のお机の上のペンナイフを無断で持って帰ってしまった。母に手をひかれてそれをお返しとお詫びに行った。すると八重子夫人が、それを下さって、その上お菓子をつつんで下さった。いいおば様だったといつも思い出話をしてくれた。

田辺がなくなった直後、田畑先生がその寮に私と娘二人をとめて下さった。幾度も聞か

された幼時期の思い出話はこの家や寺町御門あたりのことで、あの庭か、この部屋かなど、なつかしさにたえかねて娘達と部屋、部屋を見てまわった。丁度春やすみで女子学生の姿は見えず、静かな住居であった。

いろいろな面で同志社から受けたものが多く、また御縁も深いように思う。私から同志社を取り去ったら何が残るだろうか。

最近、東京のまん中、銀座四丁目の教文館ビルに同志社の倶楽部ができた。二月一日開所のお祝いにうかがった。母校にはなかなかたずねて行くひまのない私達も、東京で同志社人と会えて、同志社気分にひたり、同志社を語る場を持つことができるようになった。

東京にすむものとして非常にうれしいことである。その時話されたように、大阪にも、京都にも、神戸にも名古屋にもというようにぞくぞくクラブが開かれて行くところなんにいいだろう。いや私はもともとよく深く、どんなよくである。私は、日本のあちこちに、同志社の分校があればいいのにとさえ思う。

母校の発展と先生方や学生、生徒の方達の御多幸を心からおいのりしている。

(昭和三年大卒・専修大学教授)



南国春愁行 —ゼミ旅行雜詠—

西村 裕通

(経済学部教授・社会政策)

水に散る血潮の想いか春あわく
満月冴えて西に旅ゆく

海地獄^{しろひけ}白池地獄血の池は

ひそけき恋の色にてありき
別府路は高崎山の猿の群に
かなしき人の性をみにけり

日向路はフェニックス高しそのかみの
わがはげしさもよみがえらんとす

宮崎は日向の頃ゆかみがみの
愛でたまいしかおみなうるわし

さつま路の早咲き桜葉となりて
光もあらぬ春の日をゆく
さつま路の菜の花畑は光なくて
笑かなしきおとめらとゆく
くるめきのうれいのか菜の花の
光かなしきさつま路をゆく

うらひむるなげきにたえつさつま路は
光もなくて桜島もゆ

心ひろく心きびしき人ならん

西郷の国海と山もゆ

その眉のきびしき色のいまもかなし

西郷像に桜島もゆ

山と空のきわまるどころ桜島の
火に生れわきてきびし雲立つ

南海の荒磯^{ありそ}の色に結ばれて

開門嶽にあわき雲座す

南国の光に生いしつげの木の

かそけき櫛を売る少女あり

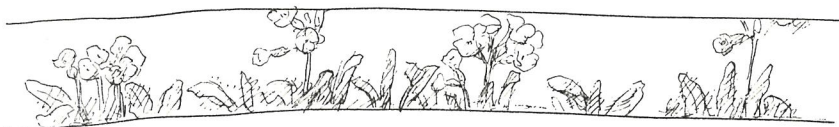
みんなみに小原はんやを売る芸者

三味ききおれば涙おちにき

南天の銀河の色か夜光虫

白く流れて潮騒やまず

さつま路におとこおみな情^{なさけ}ありて
春をかなしとおとめらはなく





酒に狂うおとめの瞳さかしくて

あわきいかりに心閉せり

おとめひとり酒に狂えど宴激し

おのこら舞いて夜はくだちゆく

おとめらは酒によえどもみんなみの

宴高まりて夜かたむきぬ

まなざしの静けき人や熊本に

明治はありき宿のお女中

あさり貝売る声きこゆ熊本は

朝まどかにやすらぎており

熊本の駅近き公園に祭あり

あわき光に旧き葉の散る

熊本の城の石垣線たけし

光なき日はしずまりありて

火の国のおみならにみななげきみゆ

うれいはうちにしずまりありて

火の国にもだしは去りぬうらなげく

おみな面に旅心して

いとかそかやすらぎはあり火の国を

今日旅ゆくにあわき陽のてる

ぬれそぼる残光もえて長崎に

はなやぎはあり春雷のする

残光に群桜あわく曇り日は

ひときわくらき原爆の塔

曇天下桜あえかにくれのこり

ひときわそそる原爆の塔

くれなずむかげりあやしきオランダ坂

ほそき夕ばえ海山にかかる

残光のかげりも果てし恋の町に

桜みだれて遠雷ひびく

らしやめんのうれいの雨かべつ甲の

まろき光に丸山は更く

みんなみの甘なつみかんざぼんの実

いもじようちゆうを賞でてたらいぬ

旅ゆけば心はとけぬたまゆらに

少年の日の帰らんものを

うらひめて燃えなるときはみんなみの

ひたぶるによす波をなげかん

心くらく沈まるときはぬきとおる

青き光の海をしのばん



シェイクスピアと同志社

手塚 竜 磨

沙翁事始め

二、三年もまえになるだろうか、その頃、雑誌や新聞で英文科のカリキュラムのことでちょっとした論争があった。卒業生の多くがむかしと違って酒造会社や証券会社へ就職するようになったのに、型どおりチョーサーやシェイクスピアを並べたてるのは無意味だ、もっと実益のあるものにかえたらどうかというのである。意見はふたつにわかれたが、実際には、ほとんど法文系大学のどこにもある英文科ないし英米文学科で、シェイクスピアの講義をはずしているところをきかない。それどころか、毎年四月にはシェイクスピア祭や記念週間の行事がめだつて活発になっていた。生誕四百年にあたる今年は、一層さかんな催しが、つきつきとくりひろげられるのではないだろうかと楽しみにしている。

卒論にシェイクスピアをとりあげたものはすくなくなつた。同志社でもL・L・L(同志社英文学会機関紙)をみると、ここ数年一、二篇にすぎない。しかし、沙翁劇上演となると、たいへんな人気である。数年前、文学座で上演した「ハムレット」と「マクベス」は再演のときかろうじてみるゝことができた。それにこりて、この頃は前売り開始前に電話申し込みという方法で切符を確保している。わが国で初演の勘三郎の「リチャード三世」も三月末にみたが、申込んだのは一月二十日前後だった。

それまでにしても、みてみ甲斐のあるのがシェイクスピア劇だが、ここではその上演史でなく、どここの学校、とくに私学ではどがシェイクスピア講義に先鞭をつけたか、そして同志社ではどうであったか、ということに

ついてふれてみたい。

わが国でいちばん早くシェイクスピアが講義されたのは東京大学である。明治六年(一八七三)の夏、開成学校の英文学教師として来日した英人ジェイムス・サマーズは九年の夏まで教えたが、当時の記録によると、チョーサー、ミルトン、シェイクスピアなどが講読されている。サマーズの業績については畏友重久篤太郎君の「日本近世英学史」に所載のいくつかの論策にくわしいのはぶく。その時期は、さき頃贈られた柳田泉早大教授の名著「明治初期翻訳文学の研究」(昭和十年初刊以来二十六年ぶりに再刊されたもの)にある「私記・明治初期沙翁書志源流」によれば、明治八年ごろではないかと考えられる。このとき、サマーズの講義をきいたものとして「日本近世英学史」の著者は山崎為徳、井上哲次郎、和田垣謙三、岡倉寛三(天心)、元田肇、坪井九馬三、加藤高明、天野為之、高橋鉉太郎、嘉納治五郎などの名士をあげている。山崎をのぞけばいずれも明治十三年から十五年にかけて卒業した文学士または法学士であるが、天野と同期の有賀長雄、高田早苗、山田一郎や、中退したけれど高田、天野らとも

に、早大の創業にたずさわった田原栄もきいたにちがいない。その頃の開成学校には法学、化学、工学の三科があり、予科ではかなり専門的な講義がおこなわれていたといわれる。そうであるとするれば、山崎とともに開成学校の後身である東京大学理学部で化学を専攻中、退学して同志社へ転じた和田正幾や、専攻はわからないけれど、やはり同時に同志社へきた横井時雄もサマーズの講義をきいたはずである。和田正幾については、山崎と同じころ、青山学院から同志社へ転じたように受けとられる記述がみられるが、青山の前身である耕教學舎の開業願が出たのは明治十一年である。和田は同志社を中退してから、十四年にやはり青山の前身である東京英学校の教師となったが、そのとき、東京府へ提出した履歴書をみれば、和田は山崎と同じように東京大学理学部で化学を専攻していたことがあきらかである。

サマーズのあとを米人ウィリアム・ホートンが襲った。十年三月に來日したが、その直後の四月には東京大学と改称され、かれはその文学部教授となってシェイクスピア、スペンサー、ミルトンなどを講じた。さきにサマ

ーズの聴講者としてあげた人たちの多くはホートンから英文学の指導をうけている。

私学のシェイクスピア講義

東京の私学の沙翁事始めはいつ頃かという問題にはいろいろ。昨年、都史紀要の「東京の大学」を書いたとき、もともと開学のふるい慶応義塾関係の公文書を明治二十年ごろまでしらべてみたが、シェイクスピアについては何の手がかりもなかった。福沢諭吉は夷学を重んじた先覚者だから二十三年の大学部文科の創設まではなかったかも知れない。明治七年開学の立教についても同様である。わかつたのは青山、早稲田の二校、それに廃校になった東洋英和学校だけであった。

明治十四年三月に提出された東京英学校の開学願では英語学は米人チャールズ・ビショップが担当し、和田正幾は学術教師、和田と同じく同志社に学び、東京大学で数学を専攻した杉田（元良）勇次郎は数学教師と報告された。教科書にもシェイクスピアものはみられない。十六年八月には教則を改め、校名も東京英和学校となったが、十七年八月になってはじめて、本科教科書一覽英文の部に、ダウ

デンのシェイクスピアがみられる。出版年が一八八三年とあるから「Introduction to Shakespeare」を指すのであろうか。

青山学院は米國メソジスト監督教会が設立したものであることはいうまでもないが、十七年にはカナダ メソジスト教会が東洋英和学校と東洋英和学校を創立した。いまは女子学校だけをのこし、男子校の普通科は変形して麻布学園となっているが、設立当初は静岡英学の伝統を継承する有力な学校であった。その高等科は同校の中等科または大学予備門の卒業生を対象にしていただけに、英文学関係の教科書にもミルトンのコーマス、チヨースターの雄士奇談、スペンサーのフェアリー・クイーンその他があり、そのなかにロルフ編のシェイクスピア作ハムレットがみられる。

早大の前身、東京専門学校の創立は明治十五年であった。開学願書はその年の九月に提出されたが、東京大学を出たばかりの高田早苗は同期の山田一郎、天野為之などとともにその創業に参画した。高田は、さっそく、シェイクスピアを講義したといわれるが、彼は大学を卒業する二、三年前に本郷元町にあつ

た進文学社（独・英學塾）でもシェイクスピアを教えた。それが明治十三年以前なら、ここがわが国の私学で最初のシェイクスピア開講の場所となるのであるが、くわしいことはまだ調べていない。

坪内逍遙は高田より一年おくれ、十六年七月に東京大学文学部を出てすぐ東京専門学校（早稲田大学）の教師となった。早稲田大学―シェイクスピア―坪内逍遙と、この三つはきりはなせないものになっているけれども、逍遙が最初のシェイクスピア担当者でなかったことはいうまでもない。東京府文書にみる最初の記録は明治十七年の英学科第四年本科一級（四年制課程の最終の半年）に課していた読方（読本シーザー）であり、教科書表の書名院本シーザー、著者シェクスピア氏、出版年月一八七九年と表示されたものである。

以上は明治十七年代代の東京の私学におけるシェイクスピア講義のすがたを示すものである。

同志社と沙翁

同志社のばあいはどうであらうか。わたしはかつて一度も同志社所蔵の史料や京都府に

ある教育史料に目をふれたことがない。震災と戦災をうけた東京でも明治初期のなまの史料が手近かにみられるのだから、いち度も災害を受けたことのない京都府の公文書は、整理さえすれば、研究者に公開されてもいいはずだ。いま、新設なった図書館に付設されている公文書館では準備中ということだが、近いうちにみたいと思っている。しかし、京都のものは京都在住者にやってもらう方が便利である。

余談はさておき、柳田泉教授の「私記・明治初期沙翁書志源流」をみると、明治十三年（一八八〇）のところに、

山崎為徳氏、同志社にてシェイクスピアを講ず。

とある。時期からいえば、さきにあげた東京の私学のばあいよりもシェイクスピアの開講は早い。山崎為徳の人となりについては「後藤新平第一巻」（二二・四刊）や「子爵齋藤実伝第一巻」（二六・五）にくわしい。さきにあげた柳田泉教授の「明治初期翻訳文字の研究」のなかにある「同志社教授 山崎為徳先生」や重久篤太郎君の「山崎為徳と英文学」（同志社英文学会機関誌「主流」第八号所載）はそ

れらにも増して貴重な研究資料である。

山崎為徳（一八五七―八二）は水沢の出身である。明治二年八月の府藩県の制定で水沢の旧城内に胆沢（いさわ）県庁がおかれたとき、おなじ年の後藤新平、一年とし下の齋藤実とともに給仕に採用された。この三人は水沢の三秀才といわれている。山崎は少参事であった熊本出身の野田豁通に見込まれて熊本洋学校に入学し、ジェームズ大尉の指導をうけて英才を発揮した。卒業後、前にのべたように、開成学校に入つてのち東京大学理学部で化学を専攻したが、その学風にあきたらず十年九月、横井時雄、和田正幾とともに同志社へ転じ、十二年の第一回卒業生の一人となった。

卒業後はすぐ母校の教師となつて、熊本洋学校や開成学校で修得した英語・英文学の知識を披歴した。ミルトンをもっとも愛好したといわれるが、シェイクスピアの講義はサマーズ直伝のもので、現存の私学のうちでは、一番早かったと思われる。その詳細については京都側の調査・研究に期待したい。

山崎為徳が卒業した翌年の十二月には同志社内で「ヴェニス商人」の邦訳「ヴェニス

府、商人の裁決」というダイアログが演ぜられたと「同志社五十年史」にのっている。

宮川経輝（シャイロック）、横井時雄（アントニオ）、山崎為徳（公爵）、金森通倫（ボーシャ）という第一回卒業生による配役であるが、わが国におけるシェイクスピア上演の最初といわれる。十八年四月の「何桜彼桜銭世中」（さくらどきぜにのよのなか——ヴェニスの商人の翻案、中村宗十郎一座により大阪戎座で上演）に五年も先行していることは特筆に値する。

この二つの事実は、シェイクスピア研究・上演の歴史の上で、同志社の地位を決定づけるものであらうと思う。

シェイクスピア劇の上演

明治三三年（一九〇〇）から大正十五年（一九二六年）まで、シェイクスピアを中心に英文学史、聖書文学、作詩論などを教授したアメリカン・ボード派遣の宣教師フランク・A・ロンバード（一八七二—一九五三）の業績については、まだ記憶にあらたなものがある。純粹の英文学者ではなく、とくに十八年間講師としてシェイクスピア講読を受持った京都大学

側の評価には意外に思われるものもあるが、大正五年ごろから逐次刊行されたマクベス、キング・リア、マリーチャント・オブ・ヴェニスなどの「スチュエーデント・シェイクスピア・シリーズ」（博文館刊）は、わが国における初期の沙翁註解書として記録にのこるものである。市河三喜博士による註解書が出るまでであったから、当時の英学生は多少にかかわらずその恩恵をうけたはずである。

同志社普通学校の出身者で、留学生としてハーヴァード大学に派遣され、大正四年以来の主任教授として同七年春辞任するまで英文科の重責をになった浦口文治（一八七二—一九四四）の東京転住以後における業績にも一言しなければならぬ。「沙翁研究浦口叢書」として三省堂から刊行された「新評註ハムレット」（七・一一刊）と「新訳ハムレット」（九・一二）を世に問うた。「新訳ハムレット」は、彼が同志社時代から提唱し、英語学界に賛否両論のあつた直読直解法、いわゆるグループ・メソッドによる試みであり、訳し方としては前後に例をみないユニークなものであった。シェイクスピア生誕三百七十年を記念して私費で「ウラグチス・シェイクスピア・

パンフレット」を刊行し、無料で希望者に頒布するなど同志社人にはめづらしい風格と気骨の持主であつた。

昭和十三年五月、新築地劇団の十周年記念に築地小劇場で全曲公演された「ハムレット」は千田是也のハムレット、山本安英のオフィーリアで大変な人気を博したが、台本に使用された「新訳ハムレット」（テアトロ社刊）は英文科出身の校友岡橋祐君が三神勲氏と共訳したものであり、また、岡倉士朗と共同演出したのは岡橋君と同期英文科出身の山川幸世君であつた。全体が普通の話コトバでつづられ、ハムレットの独白なども淡々と述べていた。このとき読んだ訳本にはいまでも感心しているが、いつの間にか手もとからなくなり、古書展でさがしているけれどいまだに手にはいらないでいる。

この校友関係者の名コンビによる訳と演出は、その年の暮れ、文学座、新協劇団との三新劇団協同公演のとき、有楽座で再演されたが、このときは山川幸世君の単独演出だった。観劇のインターバルに会った若き日の岡橋祐君のうれしそうな顔はまた懐しのこつてゐる。（大正一〇年大英卒・東京都政史料館勤務）

サイパル登頂

児
島
勘
次



写真は帰路所見カルナリ河の橋のたもとに住民が建てた木彫の將軍

えんえんと続くポーターの列にまじってサイパル氷河を登り、先発偵察隊が予定していたベース・キャンプに本隊が入ったのは九月二十七日のひる前であった。

私は初めてサイパルの全容をみた——それは静肅な能舞台で突然被衣を取りさつて現われた鬼女の面ともたとえられる凄然として威圧的な景観であつた。雪もたまらぬ急傾斜のどす黒い岩肌と亀裂を細かく開いて落ちかかるような懸垂氷河、主峰から下の氷河まで三千メートルの白絹を垂れたような美しい氷雪の急斜面が続いているのを中心としてサイパルの圈谷は長い雪峰が西尾根となつて左の無名峰に続き、右側は南に派生する急な南尾根となり、鋸歯のような岩稜が続く。雄大なヒマラヤ的景観と言うより、ヨーロッパ・アルプスの氷壁を見るような鋭さに満ちている。

すでに九月十四日、偵察隊として平林君が隊長となり、岡田君と先年オーストリア隊に参加したラクパチェリンがチャインプールを出発、ゴートコーラからサイパル氷河に廻り、ベースキャンプの位置を決め、サイパル西尾根から南西に続く無名峰（オーストリア隊が敗退したルート）の登路偵察とサイパル

南尾根に登るバットレスの可能性を見出そうと努力した。彼等がベース・キャンプ着後一週間して本隊が合流した。二十八日、平林、福田両君がラクパを伴い二晩のキャンプを予定して再び南尾根の偵察に出発、岡田君はパサンと中央部のハンギング・グレーシャの下部を見に登ったが平林隊のキャンピング・サイトに至って、午後早く帰って来た。翌朝、佐藤君はパサンと二人で無名峰の第一キャンプ候補地付近の偵察に行つて、先発偵察隊より容易なルートを見出して帰ってきた。私は松村君と南尾根の末端から再びカールライス峰（マッターホーンに酷似した峰で、オーストリア隊に登り、無名峰の登攀中、肺炎で亡くなったカール・ライスの名をとつて命名した）にそびえる鞍部へ登つて、南尾根の東側、ゴートコーラの上部を見て、サイパル東尾根から北側に出られるかどうかを見に行つた。時間を食つて詳しい偵察はできなかったが、ゴートコーラの上流が東に向かって枝別れている谷は悠々とした広さとひろがりを持ち、その登りつめたところにある雪の峰は六千メートル近い岩尾根なのだが、いかにも「はるかな谷」という感じで私の心をひどく

とらえた。アルプス的でとても私の手におえないサイパル氷河上部よりも、こんな悠久な遠さを感じさせる谷が私は好きだ。しかしもう一度、下の部落からポーターを呼びよせ、本隊を移動することは松村君の言う通り時日が許さない。引き返す時、朝は小流であつた川が遠まわりしなければならぬほど雪とけ水で大きくなつていた。二、三度霜や雪に焼かれたためお花畑にも緑の色は少なく、エーデルワイスや他に綿のような実をつけた草がややぬき出て風にそよいでいるのみであつた。サイパル氷河は瘦せた氷河で所々クレバスの裂け目に氷が見えるくらいで全体に角だつた粘板岩の落石で覆われている。東岸のモレーンの堤からは五、六十メートルも急斜面を下らないと氷河におりられない。対岸は氷河にけずりとられてすべすべした切立つた岩壁が青緑色に午後の日に光つていた。日暮れ時にベース・キャンプに帰着。寝る時は十三夜の月がさえていたが、三十日の夜来から雪がふつて夜明けには十五センチ程積つた。七時頃松村君はカミ・パサンをつれて平林隊を迎えに行き、昼過ぎガスと小雪の中を全員ベース・キャンプに帰着、直ちにキチン・テントに全

隊員が集合し、会議。西尾根は比較的安全ではあるが、あまりに距離が長すぎ、C（キャンプ）7位までは建てねばならず、日程としても十一月にかかるとチベットからゼット風が吹き、荒れ出す見込みなので、登頂の可能性薄く、隊員、セルバの数から言つてもポラー・メソッドはとれない。北側に廻るものも日数が足らない。二十九日に平林、福田両君のとりついたバットレス——建築用語からきた言葉で、控壁又は扶壁と訳され、同志社のチャペルの横側のように壁面にささえの突起のあるものを言い、登山用語としては氷雪の平らかな壁に小さい尾根状の突起がついているものを言う。尾根もナイフの刃のように鋭くがつて困難な場合もあるが、バットレスに登る場合は登路がいろいろにとれ、それだけに判断がむずかしい——は高度差約千二百メートル、登るだけに約七時間を要して、やつと尾根の三、四十メートル下までこぎつけ、南尾根に出られる可能性を見出して帰つてきた。殆んど休憩する所もない急傾斜で、雪もたまらないため、大きな雪崩の危険はない。下降は疲労激しく、スリッパしてロープでやつと助かつた場面もあつたらしい。途中一カ

所だけ岩の突起に荷物をピトン（岩や氷に打って確保する長い釘）でとめる所があるから、そこを中継として、なんとか尾根に出られたらテントをはる場所位は見付かるだろう。距離的には頂上まで近いのでこの第二キャンプから、第三か第四まで進めれば頂上攻撃の機会は得られるというのが平林君の報告であった。福田君は前日の疲労からか平林君にまかせたように終始、沈黙を守っていた。石にかじりついても登りますという平林君の意気込みに乗る以外に手はないなと私も決心して、一同の賛成を求め、南尾根を登路に裁定し、この一本勝負に全精力を集中することにした。その夜遅くまで平林君はボーラー・メソッドによる隊員とセルパの配置をきめる登頂予定図表を作った。

十月一日、岡田君は人夫四名とCⅠへ荷上げ、吹雪はげしく途中に荷物を置いて引き返す。平林君は午前中に登頂スケジュールを完成した。昨日来の降雪、約四十センチで落石に覆われたサイパル氷河も一面銀世界となる。こんな雪がたびたび降って、そのまま冬となつてはとも登山はおぼつかない。だがモンスーンあけに一度はドカ雪が降ることが

ままあるが、十月中は比較的晴天つづきの安定した天候があるというラクパやバサンの話を頼みとする。二日はよく晴れて岡田君は人夫と先発、他の隊員はラクパの案内でモレーン堤にあるというカールライスの墓に参る。一面積雪に覆われ、十年前に立てた木の十字架や石にはった墓標はビッケルでそこそこさぐって見たが見つからず、新しくケルンを積んで、訪れる人もない登山家の霊に一同黙禱を捧げた。ここから平林君のみ別れてCⅠに登る。三日は荷上げ隊の監督をして佐藤君がCⅠに入り、松村君、福田君と私はベース・キャンプで終日、ポスト・ランナーに託する手紙を書き荷物の整理をした。四日ピトラガールで雇った、ボカラから出稼ぎに来た五名のポーターのうち、比較的弱い若者二人を解雇してポスト・ランナーとともにピトラガールに返す。チャインプールからこの五名はポーターの先頭にたち、人夫の間にトラブルのあつた時も終始よくやってくれたのでキヤパンシューズやシャツをやった。一組五名のものを分けるので苦情がでるか心配していたが彼らは喜んで別れて行った。福田、

松村両君がCⅠへ荷上げのセルパやハイ・ボ

ーターについて登り、私とケーシーはモレーン堤まで見送って行き、五日はCⅠへ登るつもりだったが、行きつかぬ内に平林、岡田両君の休養隊がB・Cに帰るのに会い共に引きかえす。バットレス上部の固定綱の作業が進んだので、セルパのCⅡへの荷上げもやや楽になったらしい。コックのラクパはCⅠに居るので岡田君の料理に舌づつみを打つ。六、七日はハイ・ポーター二名はCⅠへの荷上げに出たが他は休養。スケジュールでは一日の休養であつたが高度順応のこともあり、以後、休養日は二日続きになって予定が少しずれたが、十日には岡田君とバサンがCⅡを南尾根上に張った。場所狭く風の通路にあたるためテントの底から風にあふられて安眠できないので、十一日平林、福田両君がその下方にジュラルミンのはしごをテントの底に補助したりしてCⅡを確立した。（高度約五九〇〇メートル）私はさびしがるケーシーを独りベースキャンプの留守番としてキャンプⅠに泊ることにする。「これが貴殿の義務だ」との切口上にケーシー氏もあきらめた。傍に氷河湖のあるCⅠはベースキャンプより氷雪の山肌も近くに見え、テントも高所用のハイクラス

なのですべて感じがよい。十七日にCⅢをCⅡより高度差三百メートル程上に建てる。CⅡとCⅢは距離も短かく仮のテント場のつもりであったが他に適当な場所も見付けにくく後で上部のダブル・チンネと呼んだ悪い岩場を登る時に役立った。二十日にCⅣをその上に建設し、翌日あわよくば頂上をとの気はあったが、無縁はとけと呼んでいる鋸歯状の危険な尾根を登る位のつもりで平林君とパサンの両名がCⅣを早朝出発、十時半頃そこを越して雪庇の出ている細い雪尾根をトラバースして、雪の広場のかなたに、仏塔（ミツタ）のような頂上を見出した。今迄の激しい氷雪ともうい岩峰と全く違った静謐と清浄の聖壇のやうな頂点であった。午後〇時五分に平林君とパサンプータル三号の二人は頂上に達し、CⅡのサポート隊福田、佐藤両君にトランシーバーで登頂の報告をした。福田君は直ちにCⅠの私のもとに佐藤君を送ったので夕方つんばじき私の松村君は登頂の成功を知り、感激した。松村君は少し高山病気味でCⅠに休養していたし、岡田君はラクパと、もし登頂隊が頂上から直下する氷雪の急斜面を下降する場合を考え、この日、その下部の偵察に出ていたの

で、第二隊の登頂は不可能となった。平林君も帰途、行きに通った雪庇がゴートコーラ側に雪崩落ちていた状態や天候も次第に悪化してくる模様を察して、CⅣのテント等を放棄して翌二十三日CⅠまで降りて、頂上の石を私にくれた。二十三日、佐藤、岡田両君、ベンバテンジン、アン・パサンはCⅡの撤収に登り、平林、松村両君と私はカミ・パサン、パサン・ブータルとともにベース・キャンプに帰り、明朝、登頂成功の報告をポスト・ランナーに持たせるため、ローソク、ヘッドランプをたよりに、細々とした小さいストープに手をあたためながら、ペンを走らせた。平林君は産経新聞に載せる登頂記を完成するため、私も学長や津田留守隊長や自宅への手紙を書いてつきあい、夜明けまでかかった。登頂より報告を書く方がつらいとフラフラになった平林君はつぶやいた。今度のポスト・ランナーには若くてしっかりしているカミ・パサンを走らせ、その夜はCⅠを撤収してきた福田、佐藤、岡田君およびラクパ、ペンバ等の全員で明るい月の下に祝宴を開いた。キャンプ・ファイヤーは焰を高くあげ、処女峰へバージン・ルートよりの激しい挑戦に成功した

感激に、月桂冠とトレジュアー・ブランデーの味、ひとしおおいしい。連絡将校ミスターケーシーもよくベース・キャンプの孤独に堪えてくれた。彼は今日のセレモニーにネパール語の長詩を朗読し、サーダー（頭）パサンも今まで経験したヒマラヤの最も困難な登攀の一つだったと感激の祝詞をのべた。私もこの喜びを万葉調で歌うならと

われ等は今もサイバル得たり人みなのも得がてにすとふサイバル得たり

と、上野学長に送った歌を朗誦した。あとはしかつめらしい言葉もなく、若い隊員はアメリカ西部の歌に喜びの情を托し、セルパ連も単調なネパールの歌に加えてエベレストに初登頂したテンジンの歌をチャツチャチャ調で歌って私達を喜ばした。山の歌、歌謡曲からさのさまで、ブランデーの酔いにまかせた豪華な歓喜に満ちた晩さんは月あかるく星稀な空の下に続いた。サイバルも今では見馴れて小面（こおもて）のやうに静かな美しさで私達を見守っていた。

（校友・サイバル登山隊長）